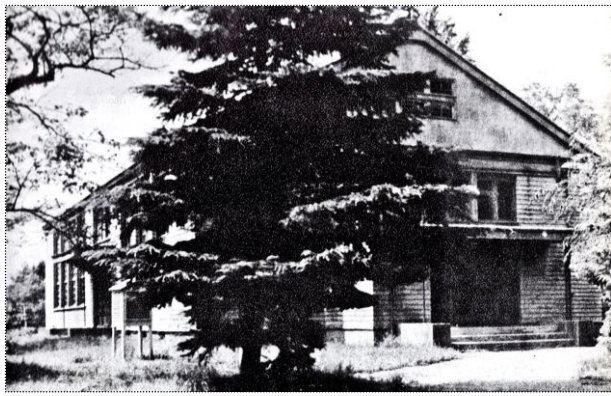




A c a n t h u s

(土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語)



進修同窓会 HP にアクセス

第 203 号

2026 (令和 8) 年 9 月 15 日

茨城県立土浦第一高等学校

進修同窓会旧本館活用委員会

H P <http://www.sin-syu.jp/>

創立 50 周年記念事業の一環として建設された講堂兼体育館 (創立 100 周年記念事業に伴って解体され、跡地に進修記念館・進修学習館が建設された)

進修会から生徒会へ

1941 [昭和 16] 年 5 月、「進修会」は、「土浦中学校進修報国団」に改組されましたが、1945 年 8 月 15 日の終戦により、報国団は消滅し、「進修会」が復活しました。しかし、1948 年 4 月、土浦第一高等学校の発足により、「進修会」はその歴史の幕を閉じ、新たに「生徒会」が創られました。今号では、「進修報国団」・「進修会」から「生徒会」への変遷を追っていきます。引用文中の旧字体は新字体に改めました。なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

進修報国団

「進修会」の主な活動は、会報『進修』の発行、陸上運動会・水陸運動会の開催でしたが、水上運動会は、土浦港の護岸工事のため、¹⁹³⁴「昭和 9」年を最後に実施できなくなりました。更に、日中戦争の拡大、日米関係の悪化に伴い、文部省は 1941 年 8 月、「学校報国団ノ体制確立方」の訓令を発し、学校毎に、学校報国団を組織し、軍事的要請に従って生徒を労務に動員し得る体制の構築を図りました。土浦中学では、訓令に先んじて同年 5 月、「進修会」が「土浦中学校進修報国団」に改組され、それまでは部であった野球部・水泳部・剣道部などが班となり、新たに設立された滑空班・修練班・研究班などととも、統括組織として設けられた総務部・鍛錬部・国防部・学芸部・生活部のいずれかに属することになり、団長には校長が就き、従来の部顧問教師が班長となって、生徒役員は校長が任命するものとなりました。

県学務課内には、本部に当たる「茨城県中等学校報国団(団長には県知事が就任した)」が置かれ、部活動は、中堅皇国民生徒の錬成のための場となり、銃後青少年学徒への指導の一層の強化が図られました。更に、同年 10 月には「進修報国団」も結成されました。これは、生徒にも臨戦態勢がいよいよ求められた結果であり、学校教育全体が、「防衛訓練」の名の下に軍隊化していくものでした。校長が隊長で、学校全体が大隊・中隊・小隊に区分され、隊長の命令一下、全生

徒が即座に各自の部署に就けるように統制が強化されました。また、学年・学級を超えた通学地域毎に一隊を構成した実践的な組織も創られ、勤労動員や軍事訓練の基盤となりました。

その後、太平洋戦争の戦局悪化に伴い、

¹⁹⁴³年 6 月には「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定され、生徒の勤労動員が強化されました。生徒たちは、鉛筆やペンを鋤やハンマーに代えて、低学年は農村に、高学年は軍需工場に動員され、働くことになりました。更に¹⁹⁴⁴年 2 月には、「決戦非常措置要綱」が決定され、生徒の通年動員が可能となりました。土浦中学でも同年 7 月から、4 年生が第一海軍航空廠へ、5 年生が東京電機製造と中村鉄工所へ通年動員となり、¹⁹⁴⁵年 1 月からは、3 年生が、同年 3 月からは 2 年生が、それぞれ第一海軍航空廠へ通年動員となり、同年 6 月からは、新 2 年生も同所で働くことになりました。学校に残った新 1 年生も、7 月から通年動員となり、近隣の農家で農作業に従事しました。

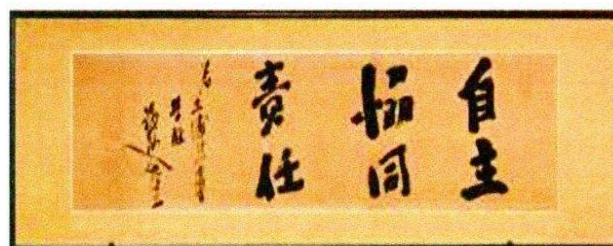
しかし、¹⁹⁴⁵年 8 月 15 日の終戦により、報国団は消滅。生徒たちは、動員先から学校へ戻ったものの、茫然自失の状態でした。

旧制中学から新制高校へ

物資不足の中でも授業が始まると、生徒たちは徐々に虚脱状態から脱して、活動を再開しました。

¹⁹⁴⁶年 3 月 30 日に校長に就任した今宮千勝は、5 月 1 日に学校教育方針「自主・協同・責任」について指示し、教職

員の自治会係を新たに設けました。2 日には最初の組長会議を開き、生徒の自治精神育成を図っていきました。その成果でしょうか、戦後の混乱は続いていましたが、10 月には、生徒たちの手で秋季大運動会が催されています。



校訓「自主・協同・責任」 徳富蘇峰書

れ、新校訓に沿った民主教育の実現が図られました。

¹⁹⁴⁷年 4 月 1 日、新制中学発足に合わせて、土浦中学には、併設中学校(新制中学校)が設けられ、¹⁹⁴⁵年入学生が併設中 3 年生、¹⁹⁴⁶年入学生が 2 年生となりました。

¹¹月 2 日には、土浦中学創立 50 周年記念式典と講堂兼体育館の落成式とが挙行され、3 日に 50 周年祝典記念運動会が、5 日に日本交響楽団演奏会と文学座による『我が町』の公演とが行われ、祝賀行事の日々が続きました。

¹¹月 3 日、日本国憲法発布に合わせて、新校訓「自主・協同・責任」が制定されました。同時に自治会が発足し、12 月 3 日には、全校各学級自治会が開催さ

終戦直後の土浦中学生の自治活動は、高3回岩崎孝志によれば、次のような状況でした。

「……生徒による自治組織めいたものはすぐには発足しなかったが、全校的な問題になると、組長会議で生徒の意見が求められた。組長(いわゆる級長)は各クラスで二名、まだ成績順の任命制だった。一年から四年まで(注)がもちろん一緒に、発言の大半は四年生からだった。それまで禁じられていた映画館・飲食店への出入りをめぐって、それを維持しようとする教師側と生徒側とがかなり激論になった。かなり自由主義的と思っていた先生から『雰囲気云々』の発言があったり、陸士【陸軍士官学校】帰りの生徒から硬派の意見が出たりしたが、映画館も飲食店も出入り自由になった。……」

(注)「平成9」年刊『進修百年』「旧制中学から新制高校へ」

部活動では、野球部・卓球部が1945年中に活動を再開し、その後、1947・1948年に掛けて、各部が次々と名乗りを上げ、活動を始めました。

土浦一高生徒会発足

1948年4月1日、茨城県立土浦第一高等学校が発足しました。全日制・定時制・通信制に加えて、併設中学(高4回となる3年生が在籍)も存続していました。同年5月、土浦一高自治(委員)会が、各学級自治会を基盤に成立しました。高

3回岩崎孝志は、前書の「旧制中学から新制高校へ」で、その状況を次のように記しています。

「……組長は間もなく選挙制になったが、生徒会が比較的整然とした組織・運営をするようになったのは、新制高校になった昭和二十三年度からである。準備委員会によって、数ページにおよぶ詳細な組織・規約が提案されたがクラス討議でいったんひっくり返り、いくぶん簡素なものになった。代議員による会長その他の役員選挙が行われるようになったのは、それ以降である。……」

9月4日の教務日誌の記録には、「昼休み、授業料値上げ問題につき、生徒大会あり、終わって、荒川、新橋、郡司等数名、校長と会談、同問題につき質疑」とあるように、自治会は荒川委員長を中心に活発な活動を展開していました。やがて、この授業料値上げ反対運動は、県議会への陳情にまで発展していき、更に、新制高校の自治連合会結成も着々と進行していきました。

11月4日に文化祭が、5日には運動会が開催され、以後、「文化祭」と「体育祭」とを3日間に亘り実施する方式が確立されました。

年が明けて、1949年1月には、「全校マラソン」が再開され、1960「昭和35」年までは1月14日、その後は12月23日が恒例となりました。コースは学校から藤沢八坂神社間往復約12km、1957年からは、学校から神立駅前間往復約11kmで実施されていきました。しかし、学校周辺の交通事情が悪化し、1967・1968年には、神立工業

団地のタキロン工場グラウンドを借用して、旧出島村(現かすみがうら市)方面周回約8kmでの実施となり、1968年を最後に中止を余儀なくされました。このマラソン大会に代わるものとして、翌年からは「歩く会」が実施されるようになり、現在に至っています。

「学校・神立駅前間往復コース」最後の年となった1966年、3年生竹井茂雄(高19回)は、筑波山神社近くの自宅から麓の中学校への往復などで鍛えた健脚を示す最後の機会、と意気込んでいました。神立駅前でのショートカットの誘いにも乗らず、第2集団に食らい付いていましたが、真鍋坂下十字路の立哨員・樫村昌男先生(国語 在職1960年・1967年)から、古文の授業中と全く同じの、極めて紳士的な穏やかな調子で、「ここからが心臓破りの坂です。頑張ってください。ゴールは直ぐそこです。」と掛けられた声が耳に入り、何故か力が抜け、気持ちとは裏腹にガクンとスピードが落ち、正門(現旧正門)までもさえても遠く感じました。「もうチョイだ!ガンバレッ!」といった檄ではないのが、樫村先生なんです。先生は、どんな質問にも、「好い質問ですよ。」と言いながら、特に助動詞に関するものについては、その生徒が納得するまで、いろんな用例を板書し、丁寧に説明を繰り返してくれました。「ほぼ60年前の、古くも好い想い出です。」が、竹井の述懐です。

1949年3月発行の『進修復刊第1号』には、土浦一高が発足した1948年の「進修会」各部の記録が載せられています。

旧制土浦中学からの部が、弁論部・文芸部・水泳部・野球部・庭球部・(陸上)競技部・籠球部の7部、新たに発足した部が、演劇部・美術部・科学第一部(生物部)・科学第二部(物理部)・映画部・郷土研究部・排球(バレーボール)部・卓球部・送球(ハンドボール)部の9部、計16部が活動しています。

その中で、排球部は、国民体育大会県予選決勝で、水戸商業高校を2対1で破り、福岡国体出場を決めました。同国体では、2回戦で三重伊賀神戸商業(正しくは「三重県神戸高等学校」)。現三重県立神戸高等学校に惜敗しましたが、本校初の国体出場となりました。

なお、弓道部・剣道部・柔道部は、1945年のCHQの「武道禁止令」により、学校での武道教育が禁止されており、活動ができませんでした。

各校の自治会は、授業料値上げ反対運動など、活発な活動を続けていましたが、1949年6月、県教育委員会より「公立学校における政治活動に関する政策」という通牒が発令され、生徒自治会に対する校長の監督・規制が強化されました。それにより、「生徒自治会」の名称も、「生徒会」と改称されました。

土浦一高生徒会は、1949年7月5日の生徒総会で、「生徒会会則」を決定し、9月13日、大久保会長以下の新役員が選出され、その活動をスタートさせて、ここに、旧制土浦中学以来の「進修会」は、53年間に亘る歴史に幕を降ろしました。